

陰の涙

創世記四二章17〜38節

ヨセフは彼らから遠ざかって泣いた。やがて戻って来て、話をしたうえでシメオンを捕らえ、彼らの目の前で縛った。それからヨセフは、袋に穀物を満たし、……。 (24、25)

ヨセフにスパイと疑われた兄たちは、監禁された三日間、ヨセフへの罪を思い起こし、悔い改めていました。通訳を介して兄たちの会話を聴き取っていたヨセフはこみ上げる思いを抑えきれず、別室へ行って一人涙します。兄たちの前では荒々しい言葉で強圧的に振る舞いますが、陰では涙を流し、彼らを救うために食料を十分に用意し、受け取った銀も袋にそっと返してやるのでした。このヨセフの姿は、私たちに対する神のお姿を思わせます。神が私たちに荒々しい御手を加えられるときも、その陰では愛の涙がこぼれ落ちていないのでしょうか。神はわけあって私たちにあえて苦しみを与えられることがあります。その御顔は怒りに燃えているのではなく、慈しみの涙に濡れているのです。押し寄せる困難だけを見つめるのではなく、背後にある主の御顔を仰ごうではありませんか。